

2021年度 成安造形大学附属近江学研究所 紀要 第11号

比叡山焼き討ちと天正の復興

―明智光秀の果たした役割―

大津市教育委員会文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

和田 光生

比叡山焼き討ちと天正の復興

―明智光秀の果たした役割―

大津市教育委員会文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員 和田 光生

Name:

Mitsuo WADA

Title:

The Siege of Mount Hiei and Tensho Reconstruction: The Role Played by Akechi Mitsuhide

Summary:

Oda Nobunaga burned down Hieizan Enryakuji Temple, one of the most famous temples in Japan. It was a retaliation against Enryakuji's warrior monks for their opposition to Nobunaga, but the act is etched in Japanese history as an expression of Nobunaga's brutal character. Nobunaga's vassal, Mitsuhide Akechi, was long thought to have admonished Nobunaga for this plan, but his letters reveal a different picture. In this section, we will consider how Mitsuhide approached the burning of Mount Hiei based on the limited data available.

はじめに

『天台座主記』、天正七年（一五七九）の記事は、不思議な内容が記されている。

下坂本ノ城主浅野彈正長吉後改長政ト寄附シニ
材木ヲ助クニ大宮ノ再造ヲ、先キ是ヨリ南光
坊擬講祐能為ニ本願ト企ツニ大宮ノ再建ヲ（下
略）^{〔註一〕}

天正七年、南光坊祐能を本願として、日吉社大宮の再興が企てられ、坂本城主だった浅野長吉は、それに応じて材木を寄附した、とある。この再興は、織田信長在世中であつたので、密かに進められたとも書かれている。

比叡山焼き討ちで灰燼に帰した延暦寺・日吉社の再興に関する記事の嚆矢と言え、『新修大津市史』十巻の年表でも採録されている（本文では触れられていない）。浅野長吉（一五四八―一六一一）は、豊臣秀吉の家臣で、天正十一年（一五八三）坂本城主となり、同十四年ごろ大津に城を移した人物である。坂本城主時代、坂本町中定書を出し復興した坂本の振興に努めており、坂本とのゆかりから、この記事も自然に受け止められてきたが、そもそも天正七年の坂本城主は、明智光秀である。

この時、浅野長吉は、羽柴秀吉の家臣として行動

を共にしていたはずで、坂本との接点は皆無だった。坂本に縁もゆかりもない浅野が、織田信長在世中の天正七年に日吉大宮再建のため材木を寄附したというのは無理がある話と言える。信長に遠慮して密かにこの寄附を行ったとされるが、その必然性がこの時点での浅野には見当たらない。

では、この記事をもとのように受け止めれば良いのだろうか。素直に天正七年坂本城主だった明智光秀が寄附したと読み替えてみてはどうだろう。『天台座主記』が書かれた時点では、明智光秀の名を出すことがはばかられ、浅野長吉に仮託し、光秀の功績を残したと読みとることはできないだろうか。もちろん、『天台座主記』の記事を信頼したうえでという前提であるから無理のあることは否めない。

この記事の前にもう一カ所、気になる記事が『天台座主記』にはある。元亀二年（一五七一）九月十二日の条は、比叡山焼き討ちの記事であるが、そのなかに、異本として首楞嚴院記家蔵本（叡山文庫別當代蔵）の記事が載せられている。そこには、比叡山焼き討ちの計画を、その直前に聞かされた明智光秀が、織田信長の暴挙を強く諫める話が詳細に描かれている。ただこの記事の文脈は、信長の居城を安土城とし、焼き討ちのため信長が草津に陣を敷いたところで、はじめて光秀が焼き討ち計画を聞かされ

る等、明らかに史実と異なる話である。後世に付加された記事であることは明白だが、ドラマや小説で、織田信長を諷める明智光秀というイメージの典拠になった一つである。

それはともかく、後世に書かれたとはいえ、こうした物語を『天台座主記』に挿入していることは、延暦寺にとって光秀は謀反人でなく、好意的な武将として映っていたことの表れと受け止めても良いのではないか。もちろん、天正十二年（一五八四）の横川中堂勸進状では、光秀を焼き討ちの張本人としており、一概に言えないことは確かである。

穿って考えれば、比叡山焼き討ちを行った織田信長を、本能寺の変で討った光秀は、間接的に比叡山の敵討ちをしたと映っていたのかもしれない。比叡山の仇を光秀が討ち果たしたという理解だが、のちの延暦寺における信長の評価は、必ずしも恨むべき対象と見ていない。むしろ、元龜二年、信長が比叡山を焼き討ちしたことを必然と受け止めていた節がある^{〔註2〕}。そのことから考えると、光秀による「敵討ち」という短絡的な評価も慎むべきかもしれない。

ではなぜ、後世の延暦寺における光秀像が、好意を寄せるべき武将となったのだろうか。それはどのような理由からだったのか。このことを直接語る史料は全くない。このため、ここからは思い付き、妄想の批判は否めないが、以下、光秀と比叡山について考えてみることにしよう。

一、元龜二年の明智光秀 和田秀純宛光秀書状

元龜二年（一五七一）、光秀は宇佐山城（大津市南滋賀町）を任される。前年の志賀の陣で森可成が守っていた城で、浅井・朝倉、比叡山、一向衆など反信長勢力が跋扈する湖西の最前線、京都への東の口を任されたことになる。この宇佐山城で、光秀がどのような活動を行っていたのかについては、雄琴（大津市雄琴二丁目）の土豪和田秀純に宛てた九月二日付けの書状によって、その一端をうかがうことができる。近年、多くの研究者に注目されてきた^{〔註3〕}。

和田は、六角の系譜を引くとの家伝を持つ雄琴の土豪だが、その出自は判然としない。雄琴のうち、南雄琴の在地土豪として和田はあり、前年の志賀の陣では浅井長政方として活動したと家伝に記されている。この和田に対し、光秀が味方になるよう働きかけ、同じ北雄琴の土豪八木^{〔註4〕}と同心して、それに応じることを決断し、その旨を光秀に伝えた。書状は、その決断に対する礼と指示が記されている。

書状は、「御折紙令拝聞候、当城へ被入之由尤候、誠今度城内之働古今有間敷儀候、八木方ニあひ候てかんるい（感涙）をなかし（流し）候」という文言ではじまる。八木が和田秀純の書状を携え使者として宇佐山城におもむいた。昨年まで反信長方であった在地土豪の訪問は、城内を混乱させたのだろう。八木がどのように事を納めたかは判らないが、光秀が八木に会って「感涙を流した」と言っているから、

その行動と決断がよほど嬉しかったのだろう。

この時点で、滋賀郡内において信長方と言えるのは、前年の志賀の陣で信長に味方した堅田の国人猪飼野・馬場・居初あたりで、新たに雄琴の和田・八木が加わったことになる。地の利を得ていない光秀にとってこうした在地土豪の支援は心強いことだったと言えそう。

ちなみにこの書状の中で、「堅田よりの加勢の衆、両人親類衆たるべく候か」という文言が見える。和田は猪飼野等と親戚かとの問いかけである。定かなことは不明だが、猪飼野や居初と雄琴の土豪たちに縁戚関係があってもなんら不思議はなく、むしろ、近隣とのネットワークを構築していたと考えるべきだろう。変化の激しい時代、周辺の情報も動静も分からぬままでは、戦国の荒波に飲み込まれる可能性があった。だからこそ、信頼できる近隣との関係構築は、重要だったことだろう。想像をたくましくするならば、光秀からの誘いも猪飼野などを介して伝えられたのかもしれない。

この書状で多くの研究者が注目しているのは、後半に出てくる「仰木之事ハ是非共なてきりニ可仕候、頓而可為本意候」という一文である。この書状が、比叡山焼き討ちの十日前に出されていることから、焼き討ちを前提に、「仰木を皆殺しにしよう、すぐにそうなるだろう」と言っている。「なでぎり」というショッキングな文言は、温厚な武将光秀のイメージを払拭する言葉である。

この注目すべき文言に続いて、書状は信長の動向

を伝えている。朽木成綱からの情報として「昨日志村之城」「ひしころしにさせられ候由候、雨やミ次第、長光寺へ御越し候て」と書かれている。志村城は、東近江市新宮町にあったとされ、六角氏に仕え、反信長として籠城していたようだ。一説には本願寺に呼応して反旗を翻した、ともされる。『信長公記』に「九月朔日、信長公しむらの城攻めさせ御覧候」と見え、信長の動向が逐一光秀に報告されていたことが分かる。光秀が、和田秀純に対し、信長の動きを正確に伝えているのは、何を意味するのだろうか。

これまで光秀は、比叡山焼き討ちに批判的で、本意ながら参加した、もしくは『天台座主記』にあるように、信長を諫めた武将というイメージで語られてきた。しかし、この書状から、光秀が仰木を皆殺しにしようと言っているように、積極的に、そして覚悟を持って比叡山焼き討ちという計画に臨んでいたことが読み取れる。また、和田・八木への懷柔も、比叡山焼き討ちを前提として働きかけていたことは確かだろう。単に味方になるように働きかけるのであれば、武器弾薬の提供や「なでぎり」などの具体的な行動を書き記す必要はなかったはずだ。また、正確に信長の動向を伝えているのも、比叡山焼き討ちの刻限が迫っていることを知らせる意図と読み取れるのではないか。

つまり、宇佐山城に入った光秀は、春もしくは初夏の段階で、比叡山焼き討ちを実行するための準備を綿密に行っていたと言えそう。

信長家臣団として新参者で、足利義昭の家臣という立場でもあった光秀にとって、宇佐山城主という役割は、大抜擢と言える。それに応えるべく、信長の命に懸命に励んでいたことは想像に難くない。ただ、「なでぎり」といった指示をしていることからすれば、光秀自身も、比叡山焼き討ちは避けては通れないハードルと考えていた節がある。

ちなみに、仰木は比叡山三塔の一つ横川の麓にあり、現在でも横川とのつながりが深い地域である。横川の門前町という位置付けで、里坊に類する施設もあったのではないかと想像される。だからこそ、比叡山焼き討ちのターゲットになっていたのだろう。

こうして明智光秀は、比叡山焼き討ちを前提に、山麓の土豪を懐柔し、周到な事前準備を怠らなかつた、という姿が垣間見えてくる。

同じ元亀二年のものと考えられる明智光秀書状がもう一通残されている。草津市にある天台宗の古刹、葦浦観音寺に宛てたもので、和田秀純宛書状の一月前、八月二日付けである^{註60}。

内容は、光秀が、三雲高治方（湖南市三雲の土豪）に宛てて飛脚を遣わすにあたり、通行の安全に配慮してほしいと葦浦観音寺に依頼したものである。

葦浦観音寺は、永禄十一年九月、織田信長により禁制の高札を授けられており、同年六月と考えられる織田信長判物で寺領を安堵されている。信長は、足利義昭の上洛に備え、その準備を永禄十年末から

周到に整えていたとされ、葦浦観音寺への寺領安堵もその一環だったのだろう。そもそも葦浦観音寺は、周辺の湖水運や陸上交通に一定の影響を持っており、六角氏もしばしばその力を頼っている。上洛を目指す信長にとって、是非とも気脈を通じておきたい寺だったからこそ、上洛の月に禁制を発給したのでろう。その後も岐阜と京都を往還する信長にとって、葦浦観音寺は通行の安全を確保するため、頼りにすべき寺であった。元亀元年には、永原城に居た佐久間信盛の書状が残り、信長及びその配下の武将と良好な関係を築いていたようだ。

光秀の書状には、「随而来十八日 殿様御働必定候間、可被成其御心得候」という文言が見える。『信長公記』にはこの言葉通り、八月十八日に織田信長は岐阜を発ち、近江に入つて、浅井方を攻めたのち、湖東の一向一揆の拠点を攻め、続いて比叡山焼き討ちを行っている。葦浦観音寺にどの程度の情報が伝えられていたかは定かでないが、信長出陣の正確な日時を伝えていることは、最終的に比叡山焼き討ちにつながることを示唆しているとも深読みできる。この書状にある「殿様之働必定候」が意味する中身が問題となるが、普通に考えれば、単に信長が上洛する日程が確定したから、そのように心得ておいてほしい、という意味に読み取れる。周辺の交通に一定の影響を持っていた葦浦観音寺に対し、事前に信長軍の通行時期を伝えておくことは、必要な配慮だったのだろうが、それが光秀の役割だったかは疑問だ。少しうがちすぎかもしれないが、この点を後

で考えてみたいと思う。その前に焼き討ちの状況を諸資料から整理しておく。

二、比叡山焼き討ち

比叡山焼き討ちを記した『信長公記』には、残忍な殺戮が行われた様子が描かれている。まさに「なでぎり」の世界である。

早朝より比叡山に取り掛かった信長軍は、日吉社・延暦寺の堂舎を焼き払う。攻め寄せる信長軍に対し、坂本の老若男女は逃げまどい、ことごとく八王子山へ逃げ上るが、打ち果たされていく。「僧俗・児童・智者・上人一々に頸をきり、信長公の御目に懸け、是は山頭（三塔）において其隠れなき高僧・貴僧・有智の僧と申し、其外美女・小童其員を知らず召捕り、召列れ御前へ参り、悪僧の儀は是非に及ばず。是は御扶けなされ候へと声々に申上候といへとも、中々御許容なく、一々に頸を打落され、目も当てられぬ有様なり。数千の屍算を乱し、哀れなる仕合なり。年来の御胸臍を散ぜられ訖。」まさに修羅場である。

元亀二年九月十二日、信長軍は、僧俗の区別なく、女子供の区別もなく、凄惨な殺戮が行われていたことが読み取れる。実際に阿鼻叫喚の世界が繰り広げられていたのだろう。こうして日吉社をはじめ、山上の根本中堂などの堂舎がことごとく焼き尽くされた。この焼き討ちによって、信長が抱いていた年来の「胸臍」（胸のつかえ）が散ぜられたと『信長公記』

は記している。前年の志賀の陣で、比叡山が浅井・朝倉方に味方し、苦境に立たされたことへの恨みが、これで晴らされたことと読み取れる。河内将芳氏も指摘しているように、日吉社の神体山である八王子山や山上の堂舎までは、信長軍も攻め上がったことないだろうと、山上へ逃げ立て籠もっていたところを、ことごとく焼き討ちしたのである^{〔註6〕}。

このあと「去て志賀郡明智十兵衛に下され、坂本に在地候なり。」と『信長公記』にあり、この功績によって、明智光秀は滋賀郡を任され、坂本に城を築くことになる。ではその功績とはどのような内容だったのだろうか。この点を考えていきたいが、もう少し比叡山焼き討ちの状況を整理しておく。

この出来事を、京都の人々はどうのように受け止めたのだろうか、山科言継の『言継卿記』から見てみよう。京都の街中からは比叡山が焼かれる炎や煙が実際に見えていたことだろう。現場に居るわけではないが、その惨状が次々に伝えられ、切実に受け止めていた。

九月十二日条には、「織田弾正忠、暁天（夜明け前）より上坂本を破られ放火、次に日吉社残らず、山上東塔、西塔、無動寺残らず放火、山衆悉く討ち死に」と状況を書き、「僧俗男女三四千人切り捨て、堅田等放火、仏法破滅、説くべからず、王法いかにあるべきや」と記している。町人も含め三・四千という数が討ちたれたと彼の耳には入っていたようだが、実際の数は不明である。「仏法の破滅」、「王法いかにあるべきや」という山科言継の嘆きは、当時の人々

が一樣に受け止めた正直な思いだろう。この時代「王法仏法相依」という考え方を人々は強く持っていた。天皇・公家や武家による政治支配秩序（王法）とそれを支える仏法が車の両輪のように相互に依存して国家を支えるという考え方である。王城の鬼門を守護する権門延暦寺は仏法の代表といえ、それが消滅した衝撃は、不安以外のなにものでもなかったことだろう。

この渦中で命を免れた日吉社社家生源寺行丸は、『日吉社兵乱火災記』^{〔註7〕}に次のような体験を残している。

その概要は、行丸とその息子行広、樹下資継、樹下成前の四人が内陣に参籠していたところ、尾張の兵が乱入し、内陣の四人は丸裸にされて、放り出され、大床に出たところへ永原衆の下人が坂本で奪ってきた破れ帷子をくれた。それを着て永原軍にまぎれて逃れ命拾いをした。翌十三日には仰木陣屋より山中木屋へ立ち寄り、南庄から伊香立へ逃れた、とある。

行丸等を逃がした永原衆は、佐久間信盛の配下の者たちだろう。行丸の記録をもう少し見てみると、社家中の家族も逃散し、生き別れたこと、日吉社・延暦寺・上坂本の町や堂舎が焼かれたこと、そして「八王子山前後討死一千人に及ぶや、ただし多少は勘知せざるなり、六親離別の愁嘆悲涙やまず」とある。

行丸は焼き討ちの原因を、「近來諸人悪行の間、神明仏陀天上虚空に居座や」と、人々の悪行で神仏

が虚空に逃げ去ったためではないかと言っている。焼き討ちの前年三月、多聞院英俊が延暦寺を参拝したおり、「(山上の)堂も坊舎も一円はてされたる(荒廢)体なり、僧衆はおおむね坂本に下りて乱行、不法限りなし、修学廢怠の故、かくのごとし、一山相果てる式なりとおのこれを語る」(『多聞院日記』)との印象を語っている。どこか行丸の述懐と通じるものがある。

戦乱がうち続くなか、命からがら生き延びた行丸でさえ、焼き討ちを織田信長の暴挙と捉えていなかった。むしろ世の中が荒廢し、人心も乱れていたことを原因と見ている。その中には、延暦寺大衆の僧侶らしからぬ生活も含まれていたことだろう。その結果、神仏の罰が下されたと受け止めていたようだ。

後世の物語であるが、『猿鹿懺悔物語』^{〔註8〕}にも「延暦寺の惡徒ほしいまに惡逆無動の構えを企て、碩学密徳の教化にも乗らず、また有驗の行者の下知にも従わず」「山王大師の冥助にも背き、神明仏陀の冥罰と覺ふ」といった文言で、当時の姿を語っている。権門延暦寺が持っていたはずの矜持が失われていたことを要因として語っている。

実際のところ『信長公記』の記事にあるような惨劇が繰り広げられていたのだが、とはいえ日吉社司行丸父子のように、混乱の渦中であって、逃げ延びた者もいた。行丸は、翌日朝に「仰木陣屋」へ逃げ、そこから山中を南庄、伊香立に逃れている。仰木は、明智光秀が和田秀純に「なでぎり」にしようと言っ

ていた地で『言繼卿記』では、この日仰木や南庄に信長軍が攻め寄せていたことになっている。行丸の書きぶりからすると、身を隠しながら山中を逃げており、緊迫した状態だったのだろうが、信長軍の存在には触れていない。

比叡山焼き討ちとはいえ、広大な比叡山を取り囲み、隙間なく攻めることは不可能である。おそらく兵火をかくぐり、逃れた僧も多くいたことであろう。この惨劇を逃れた僧たちが、後の天正期の復興で中心的な役割を果たすことになる。そのことに触れる前に、坂本で焼け残ったとされる寺院について見ておく。

三、比叡山焼き討ちをまぬがれた寺 聖衆来迎寺

比叡山麓にあつて焼き討ちをまぬがれた寺もあつた。比叡辻の聖衆来迎寺(大津市比叡辻二丁目)である。同寺の歴史を記した『来迎寺要書』には、元龜元年「志賀の陣」の緒戦で、宇佐山城主だった信長家臣森可成は、進出してきた浅井・朝倉の大軍に挑み、あえなく討ち死にしている。聖衆来迎寺の住持真雄は、この森可成の遺骸を夜の闇にまぎれて寺に運び弔っている。「真雄上人と坊主一兩人は本堂阿弥陀尊の前にて念仏執行、森三左衛門可成公討死を聞き届け、夜陰に忍び出て、御死骸當寺へ納め入る。」^{〔註9〕}と伝えており、真雄にとつて森は、危険をおかしてまで弔うべき人物だったようだ。

聖衆来迎寺は信長の重臣を弔った特別な寺ということになる。それが理由だったかは定かでないが、比叡山焼き討ちの時、聖衆来迎寺の関係者、什物は、事前に避難していた。

この時、真雄上人前方承知せしめ、本尊什物寺中の諸道具真俗(親族)共に船に取り乗せ、江州吉川へ馳せ付け、兵頭(主)神主衆が頓足に海辺へ出迎え、社壇籠居の体たらくなり、極月中旬まで滞留し、然る処、坂本漸く静かに成ることを聞き届け、坊主一兩人召し連れ坂本へ罷り出、柴庵を作り極月末に至る、皆々帰寺致すなり(『来迎寺要書』)

聖衆来迎寺は、京都岡崎にあつた元応国清寺の末寺である。応仁の乱以降、元応国清寺は荒廢し、什物は坂本の末寺に移されていた。この寺は、円頓菩薩戒の灌頂儀礼を行う寺であり、国家にとって不可欠の存在であつたから、実体は無くとも元応国清寺は存続し、灌頂にかかわる尊像や什物、聖教は、大切に護られていたのである。そしてこれらは、聖衆来迎寺に引き継がれ、近世以降、聖衆来迎寺は元応国清寺を兼ねている。『来迎寺要書』には、坂本にあつた元応国清寺末寺は、ことごとく焼失したように書かれているが、関係の尊像や什物・聖教は、聖衆来迎寺に今も伝来している。おそらく真雄によって避難した結果だろう。

また、聖衆来迎寺には国宝「六道絵」が伝来している。横川靈山院の宝物だった六道絵も、いつごろか聖衆来迎寺に伝来し、焼き討ちの惨禍をまぬがれ

たようだ。この寺は、近江の正倉院と呼ばれるほど多くの貴重な文化財が伝来している。そのすべてとは言えないが、多くは焼き討ちに伝来し、惨禍を逃れたのであろう。

注目されるのは、真雄が、事前に焼き討ちを知っていて、寺宝や什物、寺にかかわる人間すべてが避難していることである。寺を空っぽにするわけだから、事前に情報を得て準備していないと対応できない行動だ。多くの寺宝が護られてきたことから、『来迎寺要書』の記事は信頼できると考えると、この情報はどこからもたらされたのだろうか。

想定できるのは、明智光秀サイドからの情報提供と考えるべきだろう。森可成を弔った特別な寺、という関係性が奏功したのかもしれない。

ここから見えてくることは、光秀が宇佐山城にあって、比叡山焼き討ちの地ならしを行っていたのではないかという想像である。具体的には、雄琴の土豪和田宛の書状が物語るのみだが、聖衆来迎寺や延暦寺の一部の関係者にもこの計画が伝わっていたのではないだろうか。

そもそも比叡山焼き討ちは秘密裏に行われた行爲ではない。元亀元年秋、「志賀の陣」で浅井・朝倉軍は、比叡山の支峰に立て籠り、山麓には織田信長軍が陣を敷き、にらみあう膠着状態が続いていた。浅井・朝倉軍に味方した延暦寺に対し、信長は手を切るように交渉していたことが『信長公記』に見える。

信長は山門領を安堵する代わりに仏門に仕える身として、中立を保つよう比叡山に申し入れていた。

そのうえで、この申し入れを受け入れなければ「根本中堂・三王（山王）廿一社を初奉り、焼き払はるべきの旨なり。」との意向を伝える。しかし比叡山からは、なんの返事もなく「浅井・朝倉鼻肩せしめ、魚・鳥・女人等迄上させ、恣の悪逆なり。」（『信長公記』）というありさまであった。

信長は、中立を保たなければ、比叡山・日吉社を焼き払うと伝えている。しかし延暦寺はまったく取り合わず、浅井・朝倉に味方し、「ほしいままの悪逆」と言われる仕儀を続けていた。この対応が、翌年の比叡山焼き討ちにつながる、というのが『信長公記』の書きぶりである。この流れで言えば、信長は比叡山焼き討ちを事前通告していたことになる。

延暦寺は、それをあくまで脅しと受け止め、真剣に取り合わなかったのだらう。ただこのやりとりは、延暦寺大衆が共有していたはずだ。延暦寺が物事を判断する場合、僉議（衆議）が普通の進め方で、重要な決断が執行部（執行など）のみで行われることはなかったと思われる。『信長公記』を信頼する限り、正式な申し入れがあったのだから、衆議で諮られたと考えるべきだろう。志賀の陣の膠着状態の中、人々にこの情報は広まっていたとも思われる。河内将芳氏は、ルイス・フロイスの書簡を参照しながら、山門大衆は、信長の焼き討ちを察知しながら、日吉社や山上の堂舎まで破壊するような罰当たりなことではないだろうと認識していたと推測し、その認識の乖離が焼き討ちの惨劇に至った契機ではなかったかと指摘している。^{〔註10〕} そうであれば、信長の言葉を

脅しと受け止めず、いずれ焼き討ちが行われる、と受けとめた僧もいたはずだ。時代の流れと、織田信長という武将の思考を分析できる情報を得られた僧に限られるかもしれないが、この点を、比叡山復興との関係から次に検討してみたいと思う。

四、比叡山焼き討ちを逃れた僧たちによる山門復興

天正十年（一五八二）六月二日、織田信長は明智光秀によって討たれる。本能寺の変である。その光秀も羽柴秀吉との戦いに敗れ、あえない最期を遂げた。信長の死によって比叡山はその呪縛が解かれ、復興への機運が一機に加速する。各地に逃れていた僧侶が比叡山に戻り、復興のための活動をはじめた。

『天台座主記』天正十年十一月六日の条には表1の僧たちが復興のため駆け付けたと載せられている。織田信長が討たれて五ヵ月後のことである。ここには三十二名の僧があげられている。これに続く文章で、復興を担った僧の役割が見えており、豪盛・祐能が、比叡山で再建の準備を差配し、全宗と詮舜が、羽柴秀吉との折衝を担当。ただ、秀吉の許可をなかなか得られず、豪盛・全宗が止観院（東塔）、詮舜が宝幢院（西塔）、亮信が楞嚴院（横川）と、三塔の核となる山坊をまず復興させたと記されている。

正式に根本中堂と戒壇院の勅許が下りたのは天正十二年（一五八四）五月である。^{〔註11〕} これら主要な堂舎の復興のほか、帰山した僧たちは多くの山坊の

復興に着手していた。

ここに見える比叡山復興の魁となった僧たちの多くは、焼き討ちを逃れた僧である。『信長公記』の記述では、焼き討ちにより延暦寺は壊滅し、僧たちも悉く首を刎ねられ、逃れたものは皆無のように読み取れる。しかし、惨禍を逃れた僧も一定程度あったのである。

そして、ここに挙げられた三十二名の内訳を見ると、三塔十六谷のうちに偏りがあることが見てとれる。十六谷で見ると、西塔南尾と横川般若谷が欠けている。復興に駆け付けた僧の数も、東塔西谷が五名、西塔北谷が八名となっており、他の谷に比べれば、突出して多くの僧が集合している。復興に尽力した主要な僧の名を挙げているので、実体は定かでないが、谷によって偏りがあったことは確かだろう。彼らは、比叡山焼き討ちに際し、たまたまうまく逃れることができたのだろうか。それとも、万全の準備を整え、その時を迎えていたのだろうか。

その実態を知る手がかりとして『叡山三塔堂舎並各坊世譜』^{〔註12〕}から、検討してみる。この資料は、復興期から正徳年間までの各院坊主の記録をまとめたもので、各院坊の復興第一世を検討することで、それを担った僧が惨禍を潜り抜けたか否かと、復興のおおよその時期について、見当をつけることができる。

先の表1で『叡山三塔堂舎並各坊世譜』の記事も整理してある。当然『天台座主記』と重複するが、やはり目につくのは、西塔北谷の僧が多く難を逃れ

ていることだ。元亀元年の多聞院英俊の記述に依るならば、比叡山上の堂舎に僧の姿はまばらで、皆山下の坂本に居たと伝えている。山上に居れば逃れる術もあったであろうが、同じように坂本に居たとすれば、特定の谷の僧だけが逃れているのは、やや不自然で何か理由があるのではないかと想像したくなる。

焼き討ち当時、西塔北谷の正教院には、詮舜が居た。天正期の復興で中心的な役割を果たす僧だが、彼は元亀二年八月に光秀が書状を送っていた芦浦観音寺と深いつながりのある人物である。そこで改めて芦浦観音寺と詮舜、そして西塔北谷の関係について見てみることにしよう。

五、芦浦観音寺と詮舜^{〔註13〕}

草津市芦浦町に所在する芦浦観音寺は、聖徳太子開基と伝える古刹だが、寺の歴史が確認できるのは中興以降の応永年間からである。

芦浦観音寺に残る最古の古文書が享徳二年（一四五三）九月二十三日「室町幕府御教書」で、寺領安堵する内容である。『観音寺由緒記』^{〔註14〕}は、後世のものであるが、この寺領安堵に関連して「湖上管船ノ事ヲ命ゼラル」と見える。享徳年間と断定することはできないが、湖岸に近い芦浦観音寺が早くから近辺の水運管理に関係していたとの伝えになっている。ただ、それを検証する史料は見られない。

また、明応七年（一四九八）八月二十六日の「六

角奉行入連署奉書」は、「芝（芦）浦観音寺山王江毎月為御代官参詣、殊坂本江御用所等被仰付之間、毎度以此御過書無其煩可被勘過由也」とあるように、芦浦観音寺が日吉社への参詣や延暦寺御用で坂本へ渡航することが多かったために、過書が発給されている。宛所は、「諸関奉行御中、同志那渡」となっており、芦浦観音寺に最寄りの志那浦から坂本へ渡航していた。この時点では、水運を管理するという側面は見られないが、同寺は比叡山延暦寺の末寺であり、坂本との頻繁な往来は、湖南の山門領、東海道や中山道の交通に一定の影響力を持ち、延暦寺の活動の一端を担っていたことをうかがわせる。

ここで注目したいのは、中興第六世秀範以降の芦浦観音寺住職の動向である。秀範（大永年中〔一二五二〕頃）以降、第十二世豊舜まで（寛文五年〔一六六五〕の約一五〇年の長きにわたり、坂本〔下阪本〕四ツ家〔大津市下阪本一丁目〕に住まいし、後に芦浦へ移る西川家出身の住職が続く。西川家は、もともと武蔵国児玉党に属していたとするが、戦乱の中で近江に逃れ、蒲生郡金田村から坂本四ツ家に移ったのが秀範の父「久徳三河守藤原光時」とされる。したがって、秀範は、「江州志賀郡坂本四ツ家之里に出生仕候」と「観音寺歴代系図」^{〔註14〕}に見え、その本姓は西川氏であった。

秀範の後を継いだ七世慶順は、秀範の附弟で、父は「坂本四ツ家之里住西川光行」である。光行は、光時の子とされるから、秀範と慶順は叔父と甥の関係になる。この慶順について「観音寺歴代系図」には

「信長公御代天文廿辛亥年より天正四丙子年迄、廿五年之間勤役仕」と見え信長との関係を記している。

永禄十一年九月、信長は芦浦観音寺に禁制を与えており、その年は、足利義昭を奉じ上洛した年にあたる。『信長公記』には、六角氏を退け、九月二十四日守山まで進んだ信長は「翌日、志那・勢田の舟さし相ひ、御逗留。廿六日、御渡海なされ、三井寺極楽院に御陣をかけられ、諸勢大津の馬場・松本に陣取り。」と見え、翌日足利義昭も渡海している。芦浦観音寺は、こうした手配に尽力したのであろう。したがって、天文二十年という記事は、間違いだが、信長上洛以降関係を深めたことが想像される。安土城築城以前の信長の拠点は岐阜城であり、京都と岐阜を往還する信長にとって、近江の地は、安定させておく必要があった。そのため、元亀元年五月には、永原城に佐久間信盛、長光寺城に柴田勝家、安土城に中川重政、宇佐山城に森可成を配している。この構図の中で芦浦観音寺が果たす役割も大きかったことだろう。

佐久間信盛や明智光秀が芦浦観音寺を頼ったのも、同寺が信長と良好な関係を保っていたからといえる。慶順は、天正五年（一五七七）に亡くなっている。その前年、信長は岐阜城から安土城に居を移しており、天下人としての新たな一步を踏み出している。それを見届け、慶順は亡くなり、その跡を賢珍が継いでいる。

第八世賢珍の父は、坂本四ツ家之里に住む西川光綱で、光行の子である。この光綱は、天正二年（一

五七四）に芦浦へ移住し、芦浦観音寺の家臣となっており、西川家が同寺とより深くつながることになる。賢珍は、「信長公秀吉公御代勤役仕天正十七己丑二月朔日寂」とあり、天正十七年（一五八九）に亡くなっているが、信長、秀吉の御用を勤める寺であったことに変わりない。そして賢珍の跡を継いだのが第九世詮舜で、賢珍の附弟であり、実の弟であった。

詮舜の業績は、西塔瑠璃堂横に立つ「舜公碑銘」という石碑に刻まれている。元文二年（一七三七）二月藤原常雅（花山院常雅、一七〇〇―一七一）によって撰ばれ、藤原隆英の書とある。詮舜の事績が刻まれており、『天台霞標』や『西塔堂舎並各坊世譜』に採録されている。現在の芦浦観音寺住職西川浄海氏が著された『芦浦観音寺探訪』^{〔註13〕}に導かれてその概略を紹介する。

詮舜は、天文九年（一五四〇）頃に生まれている。幼い頃から「出塵の志」があったが、兄賢珍がすでに出家していたために父に反対される。しかしその強い志で説得し、十四歳で西塔正教坊詮運阿闍梨に従い出家する。詮舜は、真摯に仏教に取り組んでいたが、その環境は良好なものではなかった。

當時の僧侶は、向上して精進することを止め、やりたい放題であった。しかし、その道を志す僧侶もいたので、邪正は入り交じっていた。遺された教えが失われていくばかりか。元亀年間に、比叡山の仏利は、兵乱で放火され、建物が壊される目に遭う。僧侶は離散し、阿闍梨（詮舜）

は逃げて観音寺に身を寄せた。仏に誓って曰く「吾は素から志願が有ったが、然るに今遂に困難に出会う。本山は焦土となったが、いままでも一日も志を忘れたことはない。唯、冀くば仏刹が以前のように復旧し、僧侶が再び集まらんことを。もし事、就らざれば再生を期して、もつて我志を遂げん、」（西川氏の現代文に若干手を加えた）

焼き討ちに関する記事で、再生してでも延暦寺の復興を心に期す詮舜の気概が伝わってくる。焼き討ちが行われた元亀二年（一五七二）、詮舜は三十一歳、「元亀二年回峰苦行を修す」（『西塔堂舎並各坊世譜』正教院再興第一世詮舜の記事）とあり延暦寺の苦行である回峰行に取り組んでいた。詮舜が住持を勤める正教坊は、「北嶺回峰石泉坊流の行門室」^{〔註14〕}とされ、彼も回峰行者だったのである。前年の志賀の陣で混乱する比叡山で、天台僧として回峰行に取り組む姿勢には、宗教者として真摯に仏法を求道する思いが伝わってくる。戦国の世にあつて、祖師や先人の教えに学びながら、延暦寺の在り方を模索していたのではないだろうか。個人的な感想だが、この姿勢は、どこか慈円の若い頃と重なるように感じた。

改めて、比叡山焼き討ちを逃れた西塔北谷の僧と詮舜の関係を見ると、同じ北谷浄泉坊良周は詮舜の「法属」、また北谷瑞雲院豪運は、「師伯詮舜」とあり、法類と言える。詮舜と志を同じくする僧は、彼の周りに集まっていたことだろう。想像でしかないが、詮舜は、芦浦観音寺経由で焼き討ちの可能性

を察知し、いち早く難を逃れたのではないか。また詮舜につながる僧たちも、同様であったかもしれない。その可能性を推測させる逸話として『西塔堂舎並各坊世譜』の中堂（転法輪堂）の項に、本尊の釈迦如来像について、次のような記事が見られる。

元亀の兵燹に、（本尊を）化人持ち去る、江州高島郡水尾邑に寄隠す、人これを知らず、天正の中、本山重復しめ、衆まさに新像を造らんとす、時に正教坊詮舜たちまち瑞夢を感じ、因て深くこれを怪しみ、すみやかに往きて像を彼において覚む、果たして得ること夢の告げに合ふ、大いに驚喜踊躍し、迎し来る之を奉る、実に天

正十三年乙酉十二月二十八日也、

比叡山焼き討ちにまつわる靈驗譚の一つで、高僧詮舜の逸話といえるが、もし彼が焼き討ちを事前に察知していたとすれば、西塔の中堂である転法輪堂の本尊を密かに疎開させていたと読み取ることもできるだろう。

詮舜は、延暦寺の仏教を真摯に求道する僧であるとともに、天正の延暦寺復興にあたって豊臣秀吉との調整役を務めるなど、権力者の信頼を得て大きな役割を果たした。世俗の論理にも長けた傑出した僧だったと言える。天正十七年（一五八九）観音寺住持となつてからも、湖水船奉行を勤め、琵琶湖水運を管理し、秀吉の蔵入地の管理も任されており、秀吉に信頼された実務能力の高い僧という姿が浮かび上がってくる。「舜公碑銘」には、秀吉から還俗を勧められたが、断つた逸話が見られるのも、並外れ

た能力の持ち主だったからだろう。慶長五年（一六〇〇）、詮舜は死の床にあつて次のように言い残したと伝える。

徒弟に囑して曰く、吾山今既に興復す、及び旧と蓄えし所の経論古書漸く集まる、僧徒もまたようやく帰れり、然れども往日の十が一にあらざ、吾嘗て山上に就て三所に経蔵を建て、あまねく天下に告げて、散逸の書籍を探索し、以て収蔵せんと欲すの志ありて、いまだ遂げず、これうらむべし（心残り）、汝らこれを勉めよ、言い畢て、仏号を称し安詳として逝す、世寿六十一（「舜公碑銘」）

延暦寺におけるもつとも大切な営為、つまり天台仏教を学び修行し、様々な法会を営むためには、聖教が不可欠である。それは堂舎の復興と同じく重要なことであつた。詮舜は、焼き討ちで散逸した経論を集め経蔵を建てる悲願を弟子たちに託している。この遺言は、第十一世舜興によって遂げられ、正教蔵として、現在西教寺に伝えられている。比叡山の復興は堂舎や尊像、什物などの復興とともに、聖教の整備が不可欠であつた。江戸時代に入る頃に整備された天海蔵が最も充実した聖教と考えられるが、正教蔵や真如蔵（東塔南谷実蔵坊復興二世実俊による蔵書）など多くの聖教が整備されたことも注意すべきだろう。

それはともかく、限られた資料から見た詮舜像は、時代の転換点にあつて、延暦寺の在り方、僧の在り方を深く考え、次の時代を見据えた延暦寺の再建に

邁進した僧侶だった、と言えるのではないだろうか。それは、焼き討ちにより一時この世から消滅した延暦寺を再興するため、全身全霊を傾けた、全宗や豪円など多くの僧に共通する志だったように思える。中世、権門寺院として大きな力を振るっていた延暦寺は、戦国時代の変化の中でその存続が危ぶまれる状況に陥っていた。その実感を心ある僧は誰もが持っていたのかもしれない。比叡山焼き討ちという不幸なインシエーションを経ることによって、近世延暦寺へと脱皮することができたとするならば、その犠牲はあまりにも大きかった。

六、明智光秀と施薬院全宗

最後に、再び明智光秀に戻って考えてみよう。光秀をめぐる元亀三年の次のエピソードが気になっていた。光秀は坂本城主の傍ら京都代官も兼ねており、その京都での宿が徳雲軒、すなわち施薬院全宗宅であつたと早島大祐氏は『明智光秀 牢人医師はなぜ謀反人となつたか』^{〔註16〕}で指摘されている。『兼見卿記』元亀三年九月十七日条に「明智十兵出京也、為見廻罷向了、逗留徳雲軒也」と見えるもので、焼き討ちの翌年、光秀は徳雲軒宅に京都見廻りのため逗留していた。

この記事を読んだとき、不思議な感じを持った。というのも、天正の比叡山復興で、詮舜とともに秀吉との交渉を担った施薬院全宗である。彼は著名な医師として知られるが、一方、横川で修行した天台

僧であり、焼き討ちを逃れ、京都で医師として暮らしていた。

比叡山を焼き討ちされた側の全宗が、翌年には焼き討ちした側の光秀に「京都のお宿」を提供しているのが不自然に思えたからだ。単に光秀の命令に逆らえなかったのかもしれないが、実は以前から何らかの関係があったのではないかと疑ってしまう。また全宗は、元龜三年に光秀を迎えるほどの屋敷を京都に構えていたのだから、名医としての地位をすでに確立していたのだろう。単に比叡山から逃れた仮の宿とは思えない。

京都の情勢も安定しているとは言えない時期に、光秀を滞在させていることは、互いに深い信頼関係があったのではないかと想像され、以前から知己であつたのではなかろうかと思える。この点は、早島氏も指摘されており、その根拠として、光秀に医術の心得があつた点に注目されている。近年の研究で『針葉方』という医学書の奥書に「明智十兵衛尉、高嶋田中籠城の時の口伝也」との記事が見え、光秀が医学の知識を持っていたことが確認されている。

この記事を永祿九年（一五六六）の出来事と早島氏は推定されており、光秀が越前に居た頃のことになり、足利義昭に仕える直前の出来事とされる。永祿十一年以前の光秀の業績は史料がなく、まったく不明ななかで、貴重な記事なのである。光秀がいつどこで医学の知識を学んだかは分からないが、それ以前であることは確かである。一方、全宗が医術をどのように習得したかも定かではない。もし光秀が

学んでいた時期と重なるのであれば、全宗との接点も想定されることになる。そうであれば、上洛時から再び親交を深め、焼き討ち後の宿舎の提供も想定できる話である。かつ、全宗もまた、比叡山焼き討ちの可能性を事前に察知していたのではないかと想像される。そこには、復興までのシナリオも含めて議論されていたのではないかと邪推したくなる。

はじめに記したように、『天台座主記』には、天正七年、日吉大宮の復興にあたり、坂本城主浅野長吉が、ひそかに材木を寄附したことが記されている。当時の城主は明智光秀であり、浅野になつてゐることは疑問だと考えた。それに関連して、明智光秀が、坂本城を築城していた元龜三年のエピソードが『兼見卿記』に見える。光秀は、十二月十一日、坂本城築城中に、山王の敷地に城を普請したため美濃の親戚が病氣になつたと吉田兼和に相談している。そこで兼和は、「明十山王敷地安鎮之札」を遣わしている。坂本城本丸の南は七本柳と呼ばれ、日吉山王祭で御輿の船渡御が出発する場所である。その関連の船小屋などが、城の敷地となり、普請で取り壊されたのだろうか。もしかすると、七本柳まで城の施設の範囲になつてゐたのかもしれない。ともかく、何らかの形で山王の敷地を浸食し築城したのでろう。日吉社も焼けてしまい、山王祭も実施できない状況で、それでも、山王の崇りを光秀は畏れていた。神仏を畏れる心を持った光秀という姿が浮かび上がる。

また元龜四年、光秀は今堅田の合戦で死亡した家

臣を供養するため、坂本城の北西にある西教寺に供養米を寄進している。部下を思う光秀の人間性がかがえるエピソードとして紹介されている。同じ坂本にあって、焼き討ちをまぬがれた寺として取り上げた聖衆来迎寺にも、天正五年九月二十七日仏供米として七十八石九斗二合を寄進している。同寺には、天正八年二月二十六日、丹波攻めを終えた光秀が、丹波から持ち帰った鐘が寄進されている。坂本城の北に位置し、西教寺とともに聖衆来迎寺も光秀の崇敬をうける寺であつた。

坂本は、光秀にとって心安らげる場所であり、周辺の社寺への崇敬を怠らなかつたことから言えば、はじめに触れた、天正七年に光秀が日吉社のため秘かに材木を寄附したことも、ありそうな話に思える。

和田家文書で読み取れるとおり、元龜二年の光秀は、宇佐山城にあって、比叡山焼き討ちの最前線で、その準備を怠りなく進めた。聖衆来迎寺が事前に対岸へ避難したことも、光秀の焼き討ち準備の一環と考えられないだろうか。詮舜や全宗が焼き討ちを無事逃れているのも、光秀の配慮だったかもしれない。

比叡山焼き討ちは、信長の戦略にとって不可避な行動だった。一義的には『信長公記』にあるように、浅井・朝倉に与した比叡山は、許すことができない存在だった。それは抵抗勢力の排除という意味だけでなく、河内将芳氏も指摘しているように、山門領の存在や今道越（山中越）など流通の問題を総合した、信長の戦略に則した行動だったと言えるだろう。^{〔註17〕}

山門領について言えば、莊園制が崩壊しつつある

なかで、なお名目を保っていた各地の山門領は、武將たちにとって統治の障碍であったことだろう。また、流通という点からも、延暦寺・坂本を手中におさめることが重視されていたことだろう。東国・北陸からの物資は、琵琶湖水運を用いて南の玄関口坂本に陸揚げされ、京都に運ばれる。この流通の要を比叡山から奪うことは信長の戦略にとって必須だった。天正元年、明智光秀は、船を駆使して琵琶湖から浅井軍を攻撃しているように、信長は船戦を重視していた。後に坂本城・大溝城・長浜城・安土城と湖上のネットワークを形成しているのも、水運の機動力を意識した城づくりだったと言える。

信長にとって排除すべき対象は、権門として経済や流通、軍事・政治に参与する延暦寺だったと言えるだろう。

その意味で延暦寺を一時的にこの世からなくす、つまりリセットすることが比叡山焼き討ちの目的だったのでは、という想像が私の結論である。中世絶大な力を持っていた権門寺院を破壊することで、新たな時代を開こうとする信長の意思を、広く示そうとしたのではないか。その意義を光秀も共有していたからこそ、積極的に準備を進めたのかもしれない。ただ、光秀は心ある僧に避難を促し、再出発に備えさせたと考えられないだろうか。

本来ならば、天正の復興に携わった僧たちの事績を丁寧に整理して、考えるべき問題だが、わずかな事例による思い付きの議論しかできていないのは、

筆者の力不足による。今後に期したいと思う。

また私事を加えるなら、そもそも私は、和田秀純の末裔として、この問題に興味を持った素人である。聖衆来迎寺も、檀那寺にあたる。そんな身近な因縁から、勝手な解釈をしてみたのが、本稿で、史料の解釈、目配りが不十分である点は、自覚しているつもりだが、大方の御理解を賜れば幸いである。

註

1. 渋谷慈鑑『校訂増補天台座主記』比叡山延暦寺開創記念事務局 一九三五年。以下、『天台座主記』の引用は同書に拠った。
2. 吉田慈順「辰張忌考」『比叡山の仏教と植生』法蔵館二〇二〇年
ちなみに伝説は次のようなもの。
最澄は、比叡山を主宰していた振張から、十年間の契約で山を借り受けたが、その際とりかわした契約書には、いつの間にか十に一点を加え千年と変わっていた。この契約違反の恨みがシンチョウ(信長)の兵難となったという。
3. 概要は『新修大津市史』三巻 九十四―九十七頁 一九八〇年。翻刻は『新修大津市史』八巻 大津市 一九八四年。
4. 『新修大津市史』三巻では、八木を仰木の土豪ではないかと推測している。しかし、北雄琴に八木氏がかつて存在した記録があり(『村社雄琴神社記』)この場合は、雄琴の土豪の一人と考えた方がよいであろう。
5. 藤田達生、福島克彦編『明智光秀史料で読む戦国史③』八木書店 二〇一五年。観音寺宛書状は三十六頁。
6. 河内将芳「山門延暦寺焼討再考序説」『中世京都の都市と宗教』思文閣出版 二〇〇六年
7. 『神道大系 神社編二九 日吉』神道大系編纂会 一九八三年で翻刻されている。
8. 田嶋一夫「早稲田大学図書館教林文庫『猿鹿懺悔物語』(翻刻)」「国文学研究資料館紀要」第三号 国文学研究資料館 一九七七年
9. 土井通弘「(資料紹介) 来迎寺要書 三冊」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』第三号 滋賀県立琵琶湖文化館 一九八五年
10. 河内前掲書
11. 工藤克洋「秀吉と日吉社・延暦寺復興勸進」『歴史の広場』二十三号 大谷大学日本史の会 二〇二二年。天正の復興にかかる勸進を手掛かりに、復興の過程を論じている。
12. 天台宗典編纂会『叡山三塔堂舎並各坊世譜』『天台宗全書』第二十四巻 第一書房 一九七四年に所載
13. 芦浦観音寺については、現住職の西川浄海氏によって、関係資料を駆使した寺誌をまとめられている。『芦浦観音寺探訪』(二〇二〇年)がそれで、参考にさせていただいた。
14. 『大津市史』下巻 大津市役所 一九四二年 百艘船の項で翻刻されている「観音寺由緒記」・「観音寺歴代系図」を用いた。
15. 武覚超『比叡山諸堂史の研究』法蔵館 二四五頁 二〇〇八年
16. 早島大祐「明智光秀 牢人医師はなぜ謀反人となったか」NHK出版 二〇一九年
17. 河内前掲書

表1『天台座主記』天正10年11月6日記事及び『三塔各坊世譜』にある復興に尽力した僧

三塔十六谷	山坊名	僧名	備考
東塔東谷	葉樹院	全宗	
東塔東谷	(正覚院)	豪盛	初め葉樹院1世、天正13年正覚院1世
東塔南谷	南光坊	祐能	
東塔南谷	実蔵坊	実善	実蔵坊1世 天正 浄教・極楽・吉祥も復興
東塔北谷	慈光院	重順	竹林院1世 天正20年 不動慈光善光を建てる
東塔北谷	教王院	舜芸	信州仁科の人、教王坊1世 天正
東塔北谷	惣持坊	心盛	総持坊1世 天正11年
東塔北谷	蓮華院	仁秀	蓮花院1世 天正 日光院(放光院)兼
東塔北谷	観明院	舜慶	観明院1世は賢舜となっている
東塔西谷	行光坊	雄盛	行光坊1世 天正11年帰、12年坊建てる
東塔西谷	覚林坊	実見	覚林坊1世 初め秀憲
東塔西谷	護心院(元仏乗坊)	秀珍	護心院1世 天正
東塔西谷	円教院(元吉祥院)	乗俣	円教院1世 天正
東塔西谷	光円院(摩尼蔵坊)	秀順	光円院(摩尼蔵坊)1世 天正
東塔西谷	千光院(円常院)	盛俊	千光院(円常院)1世 天正雄盛造営弟子盛俊院主
東塔西谷	本覚坊(今地福院)	円智(豪円)	備前遍照院・伯耆大山寺より来る。地福院1世 天正
東塔無動寺谷	宝珠院(大樹坊)	栄仙	宝珠院(大樹坊)1世 全宗に協力する
東塔無動寺谷	十妙院(元実蔵坊)	賢栄	十妙院1世
西塔北谷	観音寺(正教院)	詮舜	正教院1世 天正
西塔北谷	正観院	舜慶	正観院1世 天正
西塔北谷	乗実坊(即心院)	豪堆(豪雄)	即心院1世 天正
西塔北谷	金台坊	尊運	愛宕松源院(所在不明)より来る。金台坊1世 天正末年
西塔北谷	浄泉坊(浄泉院)	良周	浄泉院1世詮舜 天正 良周2世
西塔北谷	瑞雲院(元教光坊)	豪運	瑞雲院(教光坊)1世 天正
西塔北谷	正蔵院	春雄	正蔵院(起教坊)1世 天正
西塔北谷	金光院	好運	金光院1世 天正
西塔北谷	栄泉院	源運	栄泉院1世 天正文禄
西塔東谷	宝幢院(今厳王院)	尊海	厳王院1世 天正 安祥院1世
西塔東谷	等覚院(真如坊)	舜慶	等覚院1世 天正12年
西塔東谷	寂光院	仙忠	寂光院1世仙重の師仙忠か 天正年中
西塔南谷	大仙院(大泉坊)	乗慶	大仙院1世 天正 (観泉坊大興坊建てる)
西塔南谷	行栄院	広清	行栄院1世 天正(善祥坊継潤〔秀吉家臣宮部継潤〕造営)
西塔北尾	尊林坊(今樹王院)	秀存	樹王院1世 天正
西塔北尾	大智院(西方院)	覚智	大智院1世 天正
横川兜率谷	恵心院	亮信	常州黒子千妙寺より来る。恵心院1世 天正12年
横川兜率谷	鶏足院	兼秀	雞足院1世 天正12年栄源に嘱
横川兜率谷	雞頭院	栄源	雞頭院1世は兼秀、栄源は2世(文禄2年寂)
横川香芳谷	定光院	亮栄	定光院1世 天正(太田牛一檀越たり)
横川飯室谷	松禅院	玄俊	松禅院1世 天正(師亮俊、六角義実・徳川秀忠・同夫人・蒲生秀行)
横川飯室谷	長寿院	光芸	長寿院1世 天正(唯心院も再興)
横川戒心谷	藤本坊(今大林院)	兼俊	大林院(藤本房)1世 天正
横川解脱谷	福成坊(今恵雲院)	俊存	恵雲院1世 俊存の時復興したかは不明

■ 天台座主記に見える復興に駆け付けた僧

■ 三塔各坊世譜に見える焼き討ちを逃れた僧

■ 三塔各坊世譜から類推される復興に駆け付けた僧

